



精霊の子供  
- コモロ諸島における憑依の民族誌

花淵馨也 著

コモロ諸島では「ジニ」と呼ばれる精霊が憑依「なんらかの霊的存在が人間にとり憑き、その身体や精神を支配する」(p.16)する現象が観察される。著者は、腕の立つ精霊憑依の施術師だと評判のファティマのもとに住み込み、ファティマに憑依するジニである サリム・アベディ の導きによって、多くのジニたちとの知遇を広げ、その語りを通して、ジニたちが構築する 親族関係 や 社会 を明らかにしていく。著者は、憑依を精神病理的に説明したり、社会的変化に対する適応として解釈したりする先行研究を批判しつつ、憑依現象の最中になされる人々の相互行為に焦点を当て、憑依という現象自体が持つ論理や、そこで創出される創造的世界の様相をとらえようと試みている。「できるだけ詳細に記述しようと努めてきた。結論などない」(p.400)という著者の言明は、対象へ真摯であろうとする人類学者のそれである。

著者の禁欲ぶりといひかえに、一読者としては、想像力を大いに刺激された。インド洋西域に浮かぶコモロ諸島は、有史以来活発に展開されてきた交易、植民活動の結節点のひとつであり、アジア、アラブ、アフリカの諸民族が混交するなかで今日のコモロ人が形成されてきた。さらに、構成4島はそれぞれに独自のアイデンティティを形成しているとのことであり、4島間での移住の結果、著者のフィールドがある島では文化がモザイク状に共存しているという。大規模な人口移動と情報メディアの発達の結果、場所と文化の乖離が進み、いわばローカリティの再編が劇的に進行しているということを、グローバリゼーションの特質をめぐってA・アパデュライが問題提起しているが、コモロ諸島はこのような事態が先行して生起していた場であったと言えなくはないか。このような場であるコモロ諸島で観察される精霊憑依は、憑依された身体がいったい誰のものか、誰のものとしてとらえればよいのかという問題を通して、ローカリティの再編の話と共振しているように思えた。

(佐藤 章)

神奈川 春風社 2005年 423p.



アフリカ都市の民族誌  
- カメルーンの「商人」バミレケの  
カネと故郷

野元美佐 著

われわれが観察するアフリカ都市は、アジアでもそうであるように都市形成時の歴史的背景、例えば植民都市的なルーツを背負っている。そのような都市の多くは独立後40年間が過ぎ、アフリカ人の都市新住民によってそのライフスタイルに合ったものに作り変えられてきた。それは都市内部での耕作や、歩道や空地での雑業、居住地区での地縁、血縁に基づく集住のスタイルなどである。また、都市と地方で繰り返される労働移動や双方向の資金循環など、都市をめぐる語られている特徴は、すでにアフリカ都市が、その他の地域の都市社会をもとに概念整理された都市論では説明できないことを明白に提示してきた。

筆者は二分法的に経済活動のインフォーマリティを位置づけたり、ルーラリティとアーバニティを分けようとする問題を指摘した先学の議論を踏まえ、この混在こそがアフリカ都市の特徴と潔く主張する。その上で、カメルーンのパミレケ商人が居住地に作り出す講組織や、住む予定もないのに村に構築する豪邸、貴族的な称号の買収、大規模な葬祭儀礼などが持つ経済的な意味や都市社会での意味を考察する。そして筆者は、長期の都市人類学的なフィールドワークを通し、時として非経済的に見えるこのカネとモノを通した村へのつながりの維持によって、パミレケ商人の都市での経済活動とライフスタイルが安定的に維持されていることを見いだす。

本書はアフリカ都市研究が他の途上国都市研究から「自立する」べく、一つの転換の機会を作ってくれたと感謝したい。また、筆者は今後の課題として、村から見た都市(居住者)を挙げているが、商人以外の都市住民がどのように村と都市をつないでいるのか、また都市化が一定の規模を超え、都市生まれの層が増加した時に、どのような変化があるのかといった課題も、評者を含めた都市研究者に残してくれたと思う。

(吉田栄一)

東京 明石書店 2005年 310p.





## アパルトヘイト教育史

ジョナサン・ヘイスロップ 著  
山本忠行 訳

1976年に起きたソウェト蜂起は、反アパルトヘイト闘争の歴史のなかで最も有名な事件の一つである。蜂起の直接のきっかけは、アフリカ人の子どもたちが通う学校で、「支配者の言語」であるアフリカンス語による授業が強制されたことであった。白人政権が推進してきたパンツァ教育政策への不満がここに来て一気に爆発し、蜂起は南アフリカ全土へと飛び火することになった。

しかし、アフリカ人向けの公的教育システムとしてパンツァ教育が始まったのは1950年代のことである。なぜソウェト蜂起に至るまで、大規模な抵抗運動は起きなかったのだろうか。また逆に、導入から約20年にわたって成功を収めてきたパンツァ教育が、なぜ結局は抵抗に遭って挫折することになったのか。本書は、この双方の問いに答えるべく、パンツァ教育を支配階級に安価で従順な労働力を提供する制度とみるマルクス主義的なアプローチと、パンツァ教育への抵抗に目を向ける自由主義的なアプローチとを統合し、パンツァ教育の誕生から崩壊までを詳細に跡付けた労作である。

パンツァ教育は、導入当初は産業界のニーズに合ったものであり、子どもの教育機会が増えるとしてアフリカ人の親にも歓迎されたという。しかし1960年代後半には、より高度な教育を受けた労働力を必要とするようになった産業界の要望と相容れなくなった。また、パンツァ教育体験の共有を土壌として、若者たちが共通の不満と政治意識を持つ大きな社会勢力となっていったことが、ソウェト蜂起につながったと著者は指摘する。当時の教師たちにインタビューを行い、保守主義と行動主義の間で揺れ動いた教師の心理を明らかにしているのも興味深い。

原著は1999年刊。アパルトヘイト体制の根幹にあったパンツァ教育に関する地味ながら重要な学術書が日本語で読めるようになったことは喜ばしい。訳者の手になる、本書の理解を助けるための論文も収録されている。

(牧野久美子)

神奈川 春風社 2004年 378p.



## アフリカ経済論

北川勝彦・高橋基樹 編著

本書は、日本経済論、中国経済論、アジア経済論などと並び、現代世界経済叢書の第8巻として編まれた。このシリーズは、「グローバリゼーションを共通テーマ」として、「エリア・スタディーの観点から各地域経済を分析」という問題意識に基づく。グローバリゼーションが進行する一方、経済パフォーマンスの地域的な差異が顕著になりつつある今日、タイムリーな企画といえよう。

アフリカ経済の重要なテーマが網羅された本書は、質の高いテキストブックに仕上がっている。第I部で経済史的記述が丁寧になされた後、第II部で主要産業と経済社会、第III部で国際経済的側面、第IV部で今後の政策的課題について論じられている。序章と終章を含めて全14章になるが、半年から1年の講義で用いる教科書として有用であろう。この1冊で初学者も、国際経済におけるアフリカの位置づけを十分理解できるはずである。

優れた教科書だとの評価を前提としていえば、次の点についての記述がもう少しあってよかったように思う。第1に、近年における域内経済関係の変化、とりわけ南アフリカ共和国のインパクトである。1990年代半ば以降、サブサハラ・アフリカ諸国において南アの経済的プレゼンスは顕著に増大している。地域統合についても論じられているが、近年の変化と絡めて議論を深める余地があったのではないか。第2に、アフリカ経済の主体に関するミクロ分析である。アフリカ経済のパフォーマンスの悪さが指摘されるが、ミクロレベルではどうなのか。何がパフォーマンスの悪さを説明するのか、経済学のツールで説明するとどうなるのか、といった点を小農やインフォーマルセクターなどを題材に、もっと突っ込んで論じてもよかった。

もっともこうした点を論じるにはより周到な議論が必要になり、本書の射程を超えるのかも知れない。本書は、アフリカ経済に関する議論を深めるための土台として、重要な役割を果たすだろう。

(武内進一)

京都 ミネルヴァ書房 2004年 321p.+viii



## 世界の食文化 ⑪ アフリカ

小川了 著

本書は、アフリカ全体の食について言及しつつ、特に著者のフィールドであるセネガルの食文化について詳しく記している。第1章ではアフリカの食の特質、第2章ではサバンナ地域と熱帯地域の主食が紹介されている。続く第3章から第5章ではセネガルの食や調理器具などが記述されており、第6章ではエチオピアの食、第7章では酒、第8章で狩猟採集民の食が紹介されている。この章立てからもわかるように、著者は本書を通して、アフリカの食の多様さや豊かさを表現している。

著者は、アフリカの食の多様性を紹介する一方で、これらの食における共通要素を指摘している。それが第1章で紹介されている「アフリカの食の三原則」である。(1)基盤食物とおかずが一体化したものととして供される、(2)嚼むのではなく飲むものである、(3)熱くしなければならない、という食の三原則のうち、特に(2)は非常に興味深い指摘である。アフリカとアジアの食には共通点が多々あるものの、アジアの常識では理解できない部分も多く、そのギャップの大きさに驚かされる。しかしこの相違点の存在が、よりいっそうアフリカの食に対する好奇心を掻き立て、思わずアフリカに食を求めて出かけたいくなる。

第4章ではセネガルの代表的な料理であるチェブ・ジェンやスープ・カンジャの料理法や材料、材料費、食べ方等が細部にわたって紹介されている。まるで料理の本のような詳細な記述には脱帽である。包丁の使い方やガスの火加減など、自分の常識とかけ離れた部分が多々あるが、「そんな使い方もあるのか」と感心する部分もある。料理の材料や調理法が書かれているため、その料理の味を想像することは容易であり、また食べ方も詳細に記述されているため、あたかも自分も皆と一緒に食卓を囲んでいるような錯覚に陥る。

アフリカの文化の中にどっぷりと浸かることができる、本書はそんな一冊である。

(原島 梓)

東京 農山漁村文化協会 2004年 278p.



## 子どもたちのアフリカ

－ 忘れられた大陸 に希望の架け橋を

石弘之 著

著者は、朝日新聞社時代から地球的な環境問題に関心を持ち、1980年代に起きたアフリカの旱魃、飢餓問題を日本に紹介したことで知られる。本書では、2002年からの2年間にザンビア日本国大使としてアフリカに滞在し見聞した事実の中から、「子ども」に関する事柄を、自ら収集した事実、資料で裏づけながら語っている。

第1章「エイズが残した大量の孤児」では、エイズで親を失う子どもたちの悲惨さが語られる。親を失うことでより貧しくなり、教育機会もより遠ざかる。そのようなエイズ孤児の8割がアフリカに集中しており、その数は1103万人からさらに増加しつつある。エイズの治療薬が年間300ドルにまで下がったというが、それさえも、彼らには高額で払えないし、定期的に検査を受けて薬を受け取る医療施設もないのである。ザンビアではエイズで亡くなった人を埋葬しても、翌日には墓が掘り起こされ、棺桶と死者の衣服が盗まれてしまうという。

第3章「女性性器切除(FGM)と少女たち」では、現在も行われており、多数のアフリカ女性から当たり前のこととして受け入れられている少女の女性性器切除の衝撃的な実態が紹介される。冷静な筆致が、問題の深刻さ・難しさを逆に浮き彫りにしている。他に、第2章「日常的にくりかえされる性的虐待」、第4章「はびこる子ども労働」、第5章「戦場で戦う少年たち」、第6章「現代に生きる子ども奴隷」と、解決までには難問山積の事柄ばかりである。

著者は、自らが見聞した援助プロジェクトの7割は成功からほど遠いと言っている。7月にグレンイーグルズで開催された主要国首脳会議(サミット)では、「アフリカ」が主要議題に取り上げられた。その背景には、世界のどの地域にも遅れをとっている、あるいは後退しているアフリカ大陸の現状がある。

資料編(アフリカ関連サイトの紹介)、主要参考文献(章別)、アフリカ各国事情(一国の現状を半ページほどにまとめている)も有用である。(鈴木陽子)

東京 岩波書店 2005年 228p.+xv





## 人間にとって農業とは何か

末原達郎 著

本書の内容を、限られた紙幅で要約することは到底できないので、その読み方について提案してみたい。

構成に忠実に、序章「人類の社会と農業へのアプローチ」から読み進めれば、そこには本書の計画が具体的な視点や接近法とともに紹介され、続く三章では、それらをふまえた著者の問題意識が開陳されている。すなわち第1章「人間にとって食料とは何か、農業とは何か」、第2章「地球規模で農業を考える」、そして第3章「統計から見えること、見えないこと」である。農業と食料に関する根源的な問いかけに始まり、「鳥の目」から俯瞰した地球規模での農業や食料問題の様相が、やや懐疑的ともとれるトーンで語られるであろう。

しかし、これでは読者の興奮はかき立てられない。著者の仕掛けは、フィールドワークについて、ややかしまって論じた第4章「農学研究におけるフィールドワークの方法論的考察」の後にやってくる。そこには「虫の目」をもって社会と農業の関係にアプローチするための三つの“窓”として、第5章「アフリカの社会と農業」、第6章「フランスの社会と農業」、そして第7章「日本の社会と農業」が用意されている。とは言え、三つの章がタイトルに掲げた三つの地域と国を詳しく語っているわけではない。それぞれコンゴ（旧ザイール）東部のムニャンジロ村、フランス中西部のブルック村、そして岐阜県郡上市（現郡上市）の白鳥町石徹白（いしとしろ）という、いずれもが小さく、また有名とも言えない農村社会が記述の中心である。

はたして、こうした小さな世界とそこに生きる人々に視点を据えることで、多様な社会と農業の関係を垣間見ることができるのか。また著者が示唆するように、これら農村社会の間にも多くの共通点があり、それらが農業そのものを見直す契機となるのか。さらに、終章のタイトルでもある「人間の社会と農業の関係性の未来」とはいかなるものなのか。まずは豊富な写真で飾られた三つの“窓”を覗いて、それから改めて著者の問いかけに耳を傾けてもよいのではなかろうか。

(望月克哉)

京都 世界思想社 2005年 279p.+iii

人種概念の普遍性を問う  
- 西洋的パラダイムを超えて

竹沢泰子 編

「民族とは」「エスニシティとは何か」など、人の差異化にまつわる用語をめぐって、アフリカ研究の現場では厚い議論の積み重ねがある。アフリカ諸国において、民主化後も続く一部の住民への市民権の制限や、国内紛争が大きな問題の一つとなっている今日、そうした差異化の検討はさらにその重要性を増しつつある。

本書が焦点を据えるのは、「人種」概念である。「近代や自らの経験に偏重しがちな欧米における人種概念の射程の狭さと、学問領域間(特に自然科学と人文・社会科学)の断絶性に、違和感を覚えてきた(p.11)」とする編者は、本書において、人種という概念と実態の史的展開を解き明かし、加えて新たな人種概念を投げ返す。古典的な人種主義と新人種主義、インドのカーストとアフリカの紛争、黒人差別と日本の部落差別など、「一見異質に見える事象をあえて同じ土俵で論じることにより、共認不可能と思えたものに通底する何か」を見い出そうとする「問題提起型の書(共にp.11)」として編まれたという本書は、重厚な学術書でありながらも、スリリングかつ知的刺激に満ちた展開で読み手を魅了する。

人種についての新旧の多様な学説から、最近のヒト遺伝子研究に至る、膨大な研究史を射程に収めた緻密な文献サーベイに立脚して、3種の人種概念を提唱した編者による総論(「人種概念の包括的理解に向けて」)の他、アフリカを扱ったものとしては、ルワンダおよびスーダン内戦の過程で人種という概念と実態が強固に構築されてしまったと指摘する栗本英世の「人種主義のアフリカ観の残影 『セム』『ハム』と『ニグロ』」、偏在する人種主義に抗するものとしての人種的共同性の実践の可能性を提唱した、松田素二「人種的共同性の再構築のために 黒人性再想像運動の経験から」がある。優れた総論を得て、多彩な論考がまとまった問題提起の一翼をなす構成になっている。各論からも、また通読しても得るところの大きい、重要な編著である。

(津田みわ)

京都 人文書院 2005年 548p.